

今日の旧約聖書は、エジプトから逃げて、ミディアン人という砂漠の民族の祭司の世話になったモーセのお話です。エジプトからやっとの思いでシナイ山、またの名をホレブという山のふもとまで旅してきたモーセは、ここで温かく迎えられ、祭司エトロの娘、ツィボラを妻にして、羊の世話をしていました。ところが、山の上から神様がモーセに呼び掛けて、エジプトで苦しむイスラエルの人たちを救い出すように、という命令を受けるわけです。皆さん、よくご存じの出エジプト記、「十戒」という映画にもなったエジプト脱出の物語の導入の話ですね。

ここで、神様はモーセに出エジプトという大事業をするように、彼に命じるのですが、この大事業はとても自分にはできない、と自分の力不足を神様に訴えます。ところが、神様は、「自分があなたを遣わすんだから、エジプトにいるイスラエルの人々を連れ出して、この山に連れて来い。」と言います。

すると、モーセは、どんなふうにイスラエルの人々に神様を紹介したらいいのか、尋ねます。さらに、今日の話の後に、モーセは、神様が自分を遣わされたということをみんなに信用させるために、どうしたらいいのか質問すると、神様は、杖を蛇に変えたり、自分の手をふところにいれて、皮膚病になったりする変化の印をモーセに教えて、さらに信用しなければ、ナイル川を赤く染める、という奇跡を起こして信用させなさい、というのです。

こんな話は、皆さん聖書物語の本や、映画などで覚えておられるでしょう。

しかし、今日私が問題にしたいのは、神様はどんな存在であり、どの様にご自分を紹介されているか、ということを考えているのです。

今日の旧約、3章の13節14節を見てください。

『3:13 モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがひありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。』

3:14 神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。』

私が神学校の学生だった頃は、口語訳聖書で、14節については、

『3:14 神はモーセに言われた、「わたしは、**有って有る者**」。また言われた、「イスラエルの人々にこう言いなさい、『**わたしは有る**』というかたが、わたしをあなたがたのところへつかわされました』と。』

ついでに引用すると、この太字の部分を、文語訳では「**我は有りて在る者なり**」「**我有り**」と訳されています。

これらを比べながら、神学生の時、私たちが理解していたのは、「神様は存在の根底」。世界のものを支える存在のみなもと」という風に理解していました。そして6年前に発行された聖書協会共同訳では、「**私**はいる、という者である。」そして言われた。「このようにイスラエルの人々に言いなさい。『**私はいる**』という方が、私をあなたがたに遣わされたのだと。」

こんな具合です。神様は「ある」のか「いる」のか、という事ばかり悩んでしまう。ところが、今考えると、私が神学校の学生だった時、教えて下さった旧約の先生のとてもユニークな説明を思い出します。

『口語訳聖書の、「わたしは有る」という訳はよくない。これは、「有る」の方に強調点が置かれる。しかし、この言葉は、主語である「わたし」に強調点がないといけない。「わたしは有る」ではなく「**わたしが有る**」と考えるべきだ。』と教えられました。

それに今度の聖書協会共同訳を結び付けたい。ひらがなの「いる」を漢字に変えて、「**私が居る**」として、それはモーセに対して「私があなたとともに居る」ということを言っているのではないか。つまり「神が私と共に居る」。インマヌエルということです。

モーセは大きな仕事をするように命じられたけど、「私が共に居るのだから、不安がらずに進みなさい」というのが、この、神様の自己紹介の内実なのではないか、ということです。

そのように考えると、直前の12節の言葉の意味がはっきりしてきます。

『3:12 神は言われた。「**わたしは必ずあなたと共にいる**。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。』

さて、このように、自分には自信がなくても、神様が共にいて下さるから、歩いて行こう、というのが信仰生活だと思います。ところが、教会生活を続けていると、神様が共にいるのではなく、自分の考えが神様の考えのように思って、他人を裁いてしまうことがあるのではないか、ということが今日の福音書、特に前半の話から想像してしまいます。

今日の福音書の前半には、二つの出来事が書かれています。ひとつは、「ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜた」という話。これは何を言っているのか、そのままではわかりません。

フランシスコ会訳の聖書には注があって、このように書かれています。

『本節の事件の原因は、ローマの支配に対するユダヤ人の反逆行為であった。この事件がエルサレムで起こったことは、犠牲を捧げる場所は、エルサレムの神殿だけであり、過越の祭りの時には、一般人もそこに入ることができたので、神殿でこの事件が起こったことが分かる。』とあります。

都のエルサレムから100キロ以上北にあるガリラヤ地方は、緑に囲まれたのどかな景色が広がりますが、この地方には、反政府運動。特に国を支配しているローマ帝国への反発が強い所です。そして、そんな過激なガリラヤの人たちが、お祭りのために大勢の集まっている所で反政府運動を計画したが、失敗して、殺されたということを報告しているのでしょう。

ローマ帝国からエルサレムを支配するように遣わされているポンテオ・ピラトによって、ガリラヤ人たちが何人か処刑されたことが話題になっているのです。イエス様は、この処刑された人々が、処刑されないガリラヤの人たちより罪深いとは言えない、と言うのです。

もう一つ、シロアムの塔が倒れて18人が死んだ事故のことも語られています。エルサレムの城壁に囲まれた中には、きれいな水がわく泉がないので、城壁の外にあるギホンの泉から、城壁の中に地下水道を引いて、シロアムの池で水が汲めるように、イエス様の時代より700年くらい前にヒゼキヤという王様が工事をしたことが旧約聖書に書かれています。

ピラトはそこからさらに水の補給改善の工事をしたらしいのですが、その影響で、塔が倒れたのではないかと。又その工事のための費用を、エルサレムの神殿に納める神殿税という税金で行ったということで、反発もあり、その犠牲者18人は、このような税金の使い方で、神様の怒りを買ったんだ。その時に死んだ犠牲者は、他の死ななかったエルサレムの人たちより罪深い、という風に理解する人たちがいたことに、イエス様は反論して、簡単に天罰のように考えるのは間違っている、と言われたのです。

こんなことは、私たちの周りにもいろいろ起こっているのではないのでしょうか。誰かが刑事罰を受けたら、それはその人が悪いんだと決めつけたり、誰かが事故に遭ったり、コロナウイルスに感染したりすると、それは自業自得だと判断したり。

それだけではありません。私たちが人々と何か一緒に仕事をする時、考えが違うと、相手が悪い、と裁いてしまうことが多いのではないのでしょうか。

モーセは神様に召される時、自分に自信がなくて、神様に頼り「私はあなた共に居る」と言っていたいて仕事に出かけたのですが、私たちは、教会の活動に関わっている時、いつの間にか、神様が共に居るのではなく、私自身が神様の立場に立って、あの人は間違っている、という批判を持つようになるのではないかと。体の様々な部分がお互いを「自分とは違うからあなたは知らない。あなたは体ではない。」などと言ってしまうことがあるのではないかと。

パウロはフィリピの信徒への手紙の3章の中でこんなことを書いています。

『3:17 兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となちなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。

3:18 何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。

3:19 彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。』

神様が共に居て下さる、という確信を持つことは大切ですが、自分が神様になったのでは、対立が起こるばかりです。自分たちが神様に従う、不完全なものであるという自覚を持ち、寛容に、そして間違っていると思う相手にも誠実に向き合い、対話をできる者でありたいと思います。